

---

**B L A D E      三匹の小人間は竜に勝るか？ 2**

月島 真昼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLADE 三匹の小人間は竜に勝るか？ 2

### 【Nコード】

N6707I

### 【作者名】

月島 真昼

### 【あらすじ】

ふとバトル物を書きたくなつたので書いてみました。興味持たれた方は【BLADE】へどうぞ

(前書き)

・半神 (デミゴッド)

悪魔と人間の混血種

・神に似た者 (ミカエル)

マナというエネルギーを使いこなせる特別な術者  
普通の人間がマナを多量に吸い込むのは毒

「派手な一撃はいらないうって言ったのはどこのどいつさ？」

「……向こうさんからしたらいまのは派手に入らないみたいよ」

「あ？」

地に伏していたワイバーンの体が薄く光った。

「目を閉じて！」

リースの声から一瞬遅れてワイバーンの体が強烈な発光し三人の視界を覆った。

「イヤぁ すまんすまん、主ら人間ではなかったのじゃな」

臉の裏に焼き付いた光が消えるのを待つてリースは目を開けた。緑髪、緑眼、武闘着のような簡素で丈夫な衣服に身を包んだ子供がワイバーンのいたはずの位置で愉快そうに三人を見上げていた。巨竜の姿はどこにも関わらず、その存在感だけが空気を圧迫している。

「形態変化……、人型を取れるのね」

子供はニヤリと笑う。片方しかない小さな角が僅かに輝いた。

「さて、人で無き主らには“試練用”の姿では物足りんかったじゃろっつ。」

ワイバーンはその場で拳を構えた。三人とはそれぞれ5〜10mほどの距離があるにも関わらず。

シークとカイゼルが武器を構え直す。リースは魔方陣を広げた。いずれもワイバーンが接近してその拳を振るったときのための動作だった。

「愉快、愉快」

ワイバーンはその場で、掌を三人に向けて突き出した。

「……?!」「」

途端に凄まじい突風が三人を吹き飛ばした。

(術式を広げた感じはしなかった……、力だけで?!)

「破壊と豊穡の神獣などと呼ばれてはおるが、余の性質はもっと単純な物じゃ」

ワイバーンは一足で宙を舞う三人に追い付く。氷の巨剣を地面に突き刺し踏みとどまろうとしたカイゼルのその鋒を手刀で砕く。

リースはかつて一度だけ見た神獣を思い出した。彼女の セラ  
フイムの性質は『ありとあらゆる風』だった。桁外れの暴風や細く  
収束された鎌風。全ての風を司る存在。

「ありとあらゆる力 それが余の性質じゃ」

疾走するワイバーンの背から飛竜の翼が生えた。それは竜の姿を

取っていたときの物より大きく、強い。  
叩きつけるようにそれを打ち降ろす。

「シーク！」

「わかつてるさ」

リースの頭上に魔方阵が浮かんだ。『機械仕掛けの神』が杖のよ  
うにその姿を変えた。

『地獄の熱風』 『還る逆襲の翼王』

炎の魔術によって吹き荒れる熱風が、  
地を這う気圧差によって生まれる気流が、

強烈な上昇気流となって巨大な翼をかち上げた。

「おおっ？」

釣られてワイバーンの小さな体が浮き上がる。（イケる……！）  
カイゼルは氷の巨剣を空中のそれに向かって振るった。

『群がる弾圧（スウォーム・スウォーム）』

だがシークが真下に向かって発した圧縮系の風の魔術によって三  
人は半ば地面に叩きつけられた。

「なんで 「伏せるサ」

刹那遅れて鉤爪のついた竜の足が彼らの頭上ストレスを薙いだ。

「まずいサ……！」

ワイバーンは上空で一度両翼を広げて衝撃波を放った。シークはちらりとリースを見たがリースは何かの呪文を唱えながらかぶりを振った。炎系の呪文ではないことは内容でなんとなくわかった。

「くっ……」

『群がる弾圧』、咄嗟にシークが放った魔術を衝撃波は易々と貫いた。リースが手を翳した。呪文を唱えたまま唯一できる動作だった。三人の体が地面に潰れた。

タンツ と軽く着地したワイバーンが彼らを振り返る。

「ほお」

最初に立ち上がったのはシークだった。続いてカイゼルがリースに肩を貸しながら、立ち上がる。

「圧縮した風を“光”で開闢させて威力を相殺したか」

自分の考えを確認するよつに言葉に出す。ワイバーンにとってこの戦いは全力でありながら娯楽でもあった。手加減はしない。だが楽しむ。そういう物だ。

「……ねえ シーク」

カイゼルが無機質な目でシークを見た。

「しゃーないさ…… いけ」

にこりと微笑んでカイゼルは「殺す」と呟いた。息を吸い込む。それからもう一度言った。

「殺す！」

地を蹴った。弾丸のように『加速』という肯定を省いて一瞬でトップスピードに到達する。レグナに匹敵する速度だとリースは思った。

ガキイツ！ 鋼鉄性の剣が硬い鱗と激突し高い音を鳴らした。翼は僅かに弾かれたが正確に刃を防いでいた。

（あれがもし“ウルスラグナ”なら）とリースは一瞬思ったがいまは意味のないことだと呪文に集中力を傾ける。

ピキピキピキ

接触面から翼が徐々に凍り付く。

（並みの生き物ならば氷付けじゃな……）

ワイバーンは自身の翼を掠めるように炎を放った。だがカイゼルはもうその場には居なかった。

「殺す……！」 真横に跳んで炎を逃れたカイゼルは、巨大な爪に捕まった。びきい 直前で氷の塊が軋む。と、突然“爪”の全てが凍りついた。



カイゼルが『絶対零度』を発動したのだ。

「術を解けカイゼル！」

シークは練っていた魔術を放り出して駆け出した。『絶対零度』は本来悪魔の能力だ。いかに『半神（デミゴッド）』と呼ばれるカイゼルやシークでも-273度なんて冷気に耐えられるはずがない。シークが空気に膜を張って外気の影響を遮断することで初めて用いることの出来る能力だった。

「偉大なる剣（グランドセイバー）！」

圧倒的な冷気と外気の温度差に脆くなった“爪を翡翠の刃が打ち砕いた。

『群がる弾圧』の威力を調整し周囲の氷をカイゼルから取り除く。シークは影に包まれた。

「っ  
」

リースとシークを遮るように翼が立ち塞がっていた。爪がシークを襲う。かろうじて機械仕掛けの神を操って盾を作った。爪が食い込んで砕けた。

（死）

爪がシークの胸に食い込んだ、その時だった。

『グングニールの白い槍』

光のような白い筋がシークの視界を貫いた。

(反物質粒子砲　！)

ワイバーンは体を反らした。その一撃はリースとシークを遮っていた翼を破壊し、爪までもあっさり粉砕した。

「本体の四肢の一本ぐらいは捉えたかったんだけど……、コントロールし損ねたか」

「……ふむ」

二本の爪と片翼を砕かれたワイバーンは残る片翼を広げる。

「『神に似た者 (ミカエル)』の技か……　開放もなしにそこまでマナを使いこなすとは大した術者じゃ」

「お褒めに預かりども」

ワイバーンもリースもすでに勝敗を悟っていた。シークの傷は深い。カイゼルは発動が不完全だったとはいえ『絶対零度』で自爆している。生きていてもおそらく意識はないだろう。

リースが『グングニールの白い槍』を使うにはまだ長い詠唱が必要だ。そのあいだにワイバーンがリースの息の根を止めることは容易だった。

「炎比べといこうか？」

しかしワイバーンにとってこれは“娯楽”だった。楽しめさえすればいい。そういう種類の戦いだっただけだ。

「主の火の中でも最も強い術を見せてみよ　それが見事余の術に打ち勝って見せたならば主と契約を結ぼうぞ」

「……んーなこと言ったらミカエル、使うわよ　あれきつついから使いたくないけど」

「ならば余も翼を使わせて貰おうかのぉ」

リースは小さく息を吐いて、大きく吸い込んだ。

ワイバーンは魔方阵を広げてたった一言だけ呟いた。「太陽」と。

(魔力原語　！)

ワイバーンの手の内にあつた小さな火球が膨れ上がる。『万色を排除する閃光』のようにその色を赤ではなく白に変える。まるで本物の太陽のように

「焔の王は高らかに歌う

彼が歌うは滅びの歌

終末の道を具現すべく

其の炎、其の軀を焼き尽くし、灰ですらも燃やし尽くし、塵と化してもまだ止まぬ

其の炎、其の魂から熱を奪い、空となりても締め付けて、マナと化してもまだ絞る

世界を原初に還すべく、焔の王は孤独に詠う」

垣間見る地獄の業火

決着は一瞬だった。リースの炎は容易にその軌跡を塵に変えた。そしてワイバーンの放った炎を呑み込んで見せた。

「……いまのなし、とかやめてよね？」

リースはぐらりと身体を傾けるとそのまま仰向けに倒れ込んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6707i/>

---

BLADE 三匹の小人間は竜に勝るか？ 2

2010年10月28日00時41分発行